

2026年4月30日

第二内科における医科学研究を終えて

琉球大学医学部医学科4年次 國吉次元

私が医科学研究の配属先に第二内科を選んだのは、「私を最も成長させてくれる場所だと感じたから」でした。医科学研究発表会も終わった現在、医科学研究の期間を振り返ってみると、実験手技の面はもちろん、研究に対する意識や論理的な思考方法など、あらゆる面において大きな成長を実感しています。

医科学研究自体は11月末から始まる予定でしたが、益崎先生にぜひ夏休みのうちからとお誘いいただき、8月、そして夏休み以降も授業の空いている時間に第二内科のラボに通わせていただきました。

初めて見るラボは見たことのない器具や一目見てわかるほどに高級な機械が多く設置されており、ワクワクが止まらなかったことを覚えています。同時に、これまで講義の中でしか触れてこなかった研究の世界に自分が足を踏み入れたのだという実感もあり、不安と期待が入り混じった気持ちでした。

実験は継代の練習から始まりました。継代はあらゆる手技の基礎となると教えていただき、初めて触れる電動ピペッターやクリーンベンチの扱いに苦戦しながら、繰り返し練習をしました。

PCRや増殖抑制試験では初めは誤差が非常に大きく、試薬を入れる順番やピペッティングの正確性など、細かな点で結果に大きく響くことを痛感しました。何が原因なのか分からず悩むこともありましたが、玉城先生にご指導をいただき、一つ一つの手技の意味をしっかりと考えることで徐々に安定したデータが得られるようになりました。

正確な手技が綺麗なデータに繋がり、それを元に考察をしていくという研究の醍醐味を肌で感じ取ることができ、自分なりに予測し工夫していくことに強く面白さを感じました。

毎週月曜日には医局カンファレンスに参加させていただきました。医局カンファレンスでは、第二内科の先生方が代謝・血液の症例についてレクチャーしていただき、学生と他の先生方が質問を行う形式でした。

私はこれまで、授業を受ける際に受け身になりがちで、質問を考えることに苦手意識がありました。しかし、毎週先生方のレクチャーを聞き、自分なりに疑問を持って質問する

ことを繰り返す中で、徐々に主体的に考える姿勢が身についていきました。レクチャーを聞きながら「どこに注目して診断をするのか」「どの症状が出ていれば重症となるのか」などといったことを考えられるようになり、学ぶこと自体がより楽しく感じられるようになりました。

また、先輩や他の先生方の質問・コメントを聞くことで、私とはまったく違う視点を知ることができ、大変勉強になりました。このような経験は、単に知識を得るだけでなく、自分自身の視野を広げ、考えを深める姿勢を養う上でも非常に重要であったと感じています。

隔週で行われるリサーチミーティングにも参加しました。そこでは、リサーチグループの先生方の研究内容を聞き、自分なりに疑問を持ちながら理解を深めるよう努めました。

参加当初は専門用語が怒涛の如く押し寄せてきて、理解するためにその都度単語や概念を調べながら聞いていましたが、次第に研究の目的や進行段階、直面している課題といった点に注目して聞くことができるようになりました。

このような経験を重ねる中で、自分の知らない領域の研究発表を理解する力が身につき、医科学研究の発表会においても、友人たちの発表内容をより深く理解することができたと感じています。

医科学研究の終了が近づく中で、発表に向けたスライド作成にも力を入れ始めました。スライドを一から作成し、先生からのフィードバックを受けて修正を重ねていくという経験は初めてであり、試行錯誤を何度も繰り返しながら完成させました。

この過程を通して、聞き手にも分かりやすいデータ提示の構成や表現の重要性を学ぶことができました。そして、最終的には自分でもとても満足のいくスライドを作成することができました。

発表会に向けて、最も意識したことは、第二内科の研究グループの先生方の医学博士審査会に参加させていただいた経験です。先生方のプレゼンテーションにおける伝え方や的確な質疑応答は私の憧れとなり、是非とも本番で先生方と同じような姿勢で臨みたいという気持ちで練習に励みました。

発表会当日には、医学部同窓会会長賞をいただくことができました。教授の先生方が多くいらっしゃる中での発表は初めてであり、非常に緊張しましたが、発表練習を重ねたことで自分なりに納得のいく形で発表を終えることができました。

自信を持ってプレゼンテーションを行い、質疑応答にもしっかりと自分の言葉で回答できたことが、今回の受賞につながったのではないかと考えています。

そして、この受賞は、自分一人の力ではなく、日々ご指導いただいた先生方のおかげであると強く感じています。本当にありがとうございます。

医科学研究を通して、研究者がどのような思考過程で研究を進めているのかを理解しました。また医局カンファレンスのレクチャーから、病気は何らかの原因によって起こるものであり、その原因を追究するためには多くのデータをもとにしながら論理的に考えることが重要であると実感しました。

これらの考え方は、私自信が将来医師として患者さんの病態を理解していく上でも大いに役立つものだと考えています。また、「論理的に考える」ためにも常に「問いを立てる姿勢」を忘れずに、今後は臨床の道を歩みながら、研究にも積極的に携わっていきたいと思います。

実験手技や実験の意味を丁寧にご指導してくださった玉城先生。いつも優しく手技のアドバイスをしてくださった仲嶺さん。学生1人で不安だったところをととても温かく迎えてくださった秘書の皆様。医局カンファレンスやリサーチミーティングで多くのレクチャーをしてくださった先生方。

そして、このような多くの成長の機会を与えてくださった益崎先生に、重ねてではありますが、心より感謝申し上げます。

夏休み前からの約7か月間、本当にありがとうございました。